



《泣ける話》 “最後のアナウンス” 東日本大震災秘話 No.2

「藤田さん。」

その日の夕方、小学校の体育館に避難していた未希の母・奈美子の姿を見た知人の志賀が呼び止めて、

「志賀さん。」

「ああ、良かった。無事だったのね……………」

がちりと手を握り合った二人は無事であったことを確認し合う。

「娘さんの声がずっと聞こえていたのよ。」

娘がいまだに見つからず、曇った表情のまま奈美子をかばうように志賀は続ける。

「彼女の放送を聞いて、私は携帯だけを持って車に飛び乗ったの。」

あの呼びかけのお陰で、私は助かることができたわ。

私だけじゃない。

きっと多くの人がああ呼び掛けに救われたのよ。

ありがとう……………」

深々とお辞儀をする志賀を見ながら、奈美子は泣き崩れてしまった。



未希さんの声は、多くの住民に届いていた。

住民に危機を知らせ続けた声の主は大津波に流され、数日後、夫がプレゼントした「ミサング」を足首に巻いたまま遺体となって発見された。

今でも彼女は死の間際まで放送を続けた防災対策庁舎前には、多くの花束が手向けられ、

「WE STAND」

「ひとりじゃない」

などの書き込みがされた国旗はためいているという……………」

参考書籍：『震災で本当にあった泣ける話』



この悲しい実話からもわかるように、人は皆、一人で生きていると思っけていても、実は私たちは、常に「見えない存在」の助けを得て人生を送っているのかもしれないのです。最大の自己犠牲の精神によって亡くなった遠藤未希さんのご家族も、「死は絶対的な終わりではない」ことを知れば、心が安らぐに違いないと思います。